



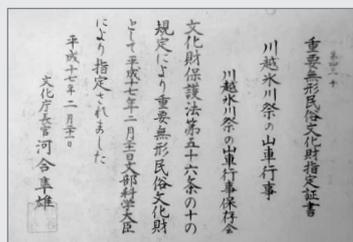
国指定重要無形民俗文化財記念

川越まつり基礎講座

いよいよ川越まつりが近づいてきました。ことし参加する山車は二十三台。例年以上に、にぎやかなものとなりそうです。今回の企画記事では、祭りをより楽しんでもらうために、川越まつりの基礎知識を紹介いたします。

問い合わせ：広聴広報課広報担当・TEL内線2124

重要無形民俗文化財とは？



人々が日常生活の中で生み出し、継承してきた衣食住・生業・信仰・年中行事等に関する風俗慣習や民俗芸能を、無形の民俗文化財といえます。その中で特に重要なものを、国は重要無形民俗文化財として指定しています。

川越まつりの場合、平成十一年度から同十四年度にかけて関係者の皆さんの協力を得ながら調査を行いました。その報告書をまとめて文化庁に提出し、重要無形民俗文化財となりました。

まずは、歴史を

川越まつりの起源は、慶安元年（一六四八）に当時の川越藩主・松平信綱が、みこし・獅子頭などの祭礼道具を氷川神社に寄進したことに始まります。その三年後に十カ町（江戸町・鍛冶町・上松江町・喜多町・志義町・志多町・高沢町・多賀町・本町・南町。現在の大手町・喜多町・幸町・志多町・仲町・松江町二丁目・元町一丁目・同二丁目）の人々が氷川神社の祭りに参加するようになりました。元禄十一年（一

六九八）には初めて踊り屋台が出ました。そして徐々に江戸で行われていた天下祭の影響を受け、大きな祭礼へと発展していきます。

明治時代に入ると、江戸は東京に変わり、まちの中に電線が張り巡らされていきます。近代化されていく中で、東京の祭りの主役は山車からみこしへと変わりました。そのため川越の山車は、江戸の天下祭の様式を伝える貴重な存在であるといわれるようになりました。

江戸時代後期から戦前の祭りは、財政事情で不定期に行われていまし



た。戦前山車が出たのは、昭和十五年の祭りが最後といわれています。戦後は、終戦から間もない同二十一年と同二十二年に日本国憲法公布



山車保有町内協議会会長
土金博さん（79歳・脇田町）

脇田町では、昭和五十七年に山車を作り、翌年から川越まつりに参加しています。

祭りにかかわる皆さんすべてがそうだと思いますが、祭りの前になると当日が待ち遠しくなります。日々のあいさつでも、皆さんが祭りを楽しみにしているのが伝わってきます。

私たちのように近年参加するようになった町内は、古くから参加している町内以上に、祭りを盛り上げようという気持ちで参加しています。

見に来ている皆さんに、前年以上に楽しんでもらえる祭りになりたい、と毎年感じています。

と施行を祝って、同二十三年に、市と商工会議所の共催で「川越商工祭」を開催し、山車が出ました。

その後は、山車が出ないことがたびたびありました。現在のようになつたのは、同四十三年からです。この年、川越まつり協賛会ができ、「川越まつり」の名称で市民のまつりとして位置づけられたためです。なお、同五十六年と同六十三年は中止されました。

同五十七年は市制施行六十周年を祝って、本川越駅から喜多町付近まで山車二十台が並び、初めて「山車ぞろい」が行われました。平成六年に元町二丁目の山車が京都の祇園祭に参加し、宵山ということばを持ち帰り、山車ぞろいが、「宵山」と呼ばれるようになりました。

同九年には、開催日を十月十四日・十五日（江戸時代は、旧暦の九月十四日・十五日）としていたのを、十月の第三土曜日と日曜日に開催するようになりました。その結果、市の内外を問わず、多くの皆さんが祭りに参加できるようになりました。

時代に合わせて変化しながら、江戸時代から三百五十年以上続く伝統が評価され、ことし二月二十一日、川越まつりは「川越氷川祭の山車行事」として国の重要無形民俗文化財に指定されたのです。